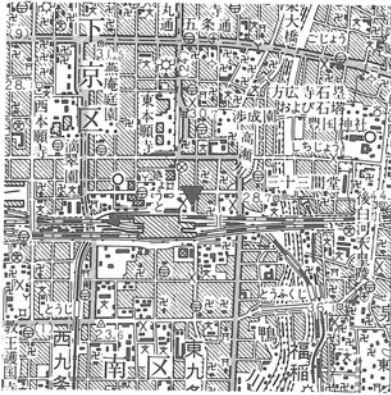


# 京都・平安京跡左京八条三坊十四町

(八条院町)

- 1 所在地 京都市下京区東塩小路町
- 2 調査期間 一九九六年(平8)一月～九月
- 3 発掘機関 (財)京都市埋蔵文化財研究所
- 4 調査担当者 上村和直・太田吉男・出口 勲・上田栄治
- 5 遺跡の種類 都市遺跡・都城跡
- 6 遺跡の年代 平安時代後期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(京都東南部)

調査地は平安京左京八条三坊十四町にあたり、中世京都の町の一つである八条院町の範囲に含まれる。今回の調査区はその北東部に位置する(東西約三五m×南北約四五m)。  
院町内及び周辺では、これまで三〇回近く発掘調査を実施している。その結果、平安時代後期の道路・湿地及び鎌倉時代～室町時代の建物・道路・土坑・溝・井戸・鑄造関係施設などの遺

構を多数検出し、町内の様相が次第に明らかになりつつある。

当地域は、平安時代後期から開発が始まり、邸宅や御所などが造営されていたが、平安時代末期には八条院障子内親王に伝領され八条院領となる。鎌倉時代には荒廃するが、正和二年(一一三三)、後宇多法皇により東寺に寄進され、八条院町となる。院町は下京の最南に位置し、平安京の条坊ではほぼ左京八条二坊・八条三坊・八条四坊にあたる。院町内には、東寺関係者や農民・僧侶をはじめとして、手工業者などが居住し、種々の店舗があり、商工業を中心とした町屋であったことが知られている。鎌倉時代後半～室町時代前半(一四世紀前半～一五世紀前半)に隆盛し、室町時代後半には衰退する。

調査の結果、調査区南西部で逆し字形の溝SD四七二を検出した。この溝の北側と東側では柱穴・井戸・土坑などの遺構を数多く検出したが、溝の南西部は遺構が少ない。調査区北部は南北柵によって区画され、東部は東西柵によって区画される。東西柵の間隔は一・一六・五mである。各区画の中では、柱穴・溝・井戸・土坑などを多数検出したほか、漆器埋納土坑・埋め甕・水溜状遺構・竪穴状遺構・便所状遺構などがみられる。

柱穴は多数検出したが、掘立柱建物としてまとまるものは少ない。復原できた建物は、一間×一間や一間×二間など規模が小さいものが多い。井戸は大路・小路から一二～一四m程度入った場所で検出

し、方形縦板横棧組・多角形縦板組・桶組・曲物組・石組など多様なものがみられる。土坑は調査区全域で検出し、一辺〇・五～三m程度のものが多い。土坑には土器などを投棄したもの他に、漆器と土師器皿・箸や、土師器と箸を大量に納めた埋納土坑も数カ所ある。遺構の時期は、一四世紀後半～一五世紀前半が中心である。

出土遺物は整理用コンテナにして約八〇〇箱あり、土器類・瓦類・木製品・石製品・銭貨・骨・種子などがある。土器類には土師器・瓦器・陶器・白磁・青磁などがあるが、大半は土師器で磁器類は少ない。木製品には漆器・箸・折敷・曲物・下駄・柿経などがある。

検出遺構から考え、町域内は東洞院大路に対しては東西方向に、八条坊門小路に対しては南北方向に、柵や溝で区画して宅地が造られていた。各宅地は、道路に面した間口幅が七～一mと狭く、奥へ二〇～二三mぐらいの短冊形を呈する。宅地内には通りに面して主屋や店舗が想定でき、奥には小屋・井戸・ゴミ捨て穴・便所などがある。町域中心部は遺構が少なく、空閑地として利用されたと推定できる。宅地割りの柵や溝は、四行八門制とほぼ合い、「八条院町年貢帳」〔東寺百合文書〕などの文献史料と考え合わせ、中世の町屋の構造を復元する上で貴重な発見と言える。

調査で出土した柿経は三〇点以上あり、いずれもSD四七二から出土した。溝の規模は幅約三m、深さ約〇・五mである。埋土は暗

灰色砂泥で、部分的に灰色砂・腐植土層が堆積する。出土遺物には土師器・須恵器・陶器・磁器・漆器・箸・折敷・曲物・下駄などがあり、土器・陶器類が多く、木製品は少ない。出土遺物は北岸・東岸側に比較的多く、宅地側から投棄した状況が推定できる。埋没した時期は、出土した土師器などから一五世紀前半と推定できる。溝は推定東洞院大路から約二四m、推定八条坊門小路から二六mに位置し、宅地内の裏側の区画溝と考えられる。

# 8 木簡の釈文・内容

- |     |  |                     |
|-----|--|---------------------|
| (1) | ・ × 四句闕看 ×   |                     |
|     | ・ × 子如此益 ×   | (43) × 17 × 1 061   |
| (2) | 「是時宅主 <sup>〔在〕</sup> □ 門外立聞有人言 ×                   | (130) × 18 × 1 061  |
| (3) | × <sup>〔具カ〕</sup> □ 相莊嚴身                           | (84) × (14) × 1 061 |
| (4) | ・ × 而於此 <sup>〔経カ〕</sup> □ 中法華最 ×                   |                     |
|     | ・ × 摩訶薩我所説經典 ×                                     | (68) × (17) × 1 061 |
| (5) | 「亦無擯出安住忍故 <sup>〔智者如カ善修其心カ〕</sup> □ □ □ □ 是 □ □ □ □ | (105) × 20 × 1 061  |
| (6) | 「能住安樂如我上説其人功德千万億劫                                  | (164) × 20 × 1 061  |
| (7) | 「算數譬喩説不能盡  | (160) × 20 × 1 061  |

- (8) 「又文殊師利菩薩摩訶薩於後末世法欲滅」  
(215)×20×1 061
- (9) 「時受持誦誦斯經典者無懷嫉妬諂誑之」  
[心カ]  
(165)×20×1 061
- (10) 「亦勿輕罵學仏道者求其長短若比丘比丘」  
(165)×20×1 061
- (11) 「尼優婆塞優婆夷求声聞者求辟支仏者求」  
(184)×20×1 061
- (12) 「菩薩道者無得惱之令其疑悔語其人言汝」  
(184)×20×1 061
- (13) 「等去道甚遠終不能得一切種智所以者何」  
(186)×20×1 061
- (14) 「汝是放逸之人於道懈怠故又亦不應戲論」  
(185)×20×1 061
- (15) 「諸法有所諍競當於一切衆生」  
[起カ]  
(175)×20×1 061
- (16) 「諸如來起慈父想於」  
[諸菩薩起カ]  
大師想於十  
(166)×20×1 061
- (17) 「方諸大菩薩常」  
[応深心恭敬礼拝カ]  
於一切衆  
(132)×20×1 061
- (18) 「生」  
[平カ]  
等說法以順法故  
[不多カ] 少乃至深愛カ  
(172)×20×1 061

- (19) 「法者亦不為多說文殊師利是菩薩摩訶薩」  
(200)×20×1 061
- (20) 「於後末世法欲滅時有成就就是第」  
[三安樂行カ]  
(152)×20×1 061
- (21) 「者說是法時無能惱乱得好同学共誦」  
[誦カ]  
是  
(186)×20×1 061
- (22) 「經亦得大衆而來聽受聽已能持持已能」  
[誦カ]  
(160)×20×1 061
- (23) 「誦已能說說已能書若使人書供養」  
[經 恭カ]  
卷  
(166)×20×1 061
- (24) 「敬尊重讚カ」  
歎余時世  
[尊カ] [比カ] [説偈カ]  
欲重宣義而  
(131)×20×1 061
- (25) 「遍滿三千界隨童即能至大小輪王及千」  
[子眷カ]  
(205)×20×1 061
- (26) 「頂所有及」  
[衆カ]  
×  
(54)×20×1 061
- (27) 「聞辟支仏菩薩諸」  
[声カ] [仏説カ]  
法皆於身  
(186)×20×1 061
- (28) 「歲過是已後其身乃×」  
(76)×20×1 061

本簡は、いずれも柿経である。形態は、頂部を圭頭状に成形した短冊形である。幅は一・五～二cmでばらつきがある。長さは二〇cm

以上であるが、全て基部が欠失しており、綴じた際に破損したものと考える。経木はいずれも柾目の薄板材を用いる。材質は不明である。

経文の内容はすべて『妙法蓮華經』である。一面の経文の字数は、長行文（散文）の場合は一行一七文字、偈頌文（詩）の場合は様々で、書写の様式に則っている。書写は、両面写経のものと片面写経のものの両者がみられる。

(1)は、第二卷譬喻品第三で、表が二五〇行目、裏が二七一行目である（行は井上松翠編『校本法華經』平楽寺書店 一九五〇年による）。

両面に書写を行ない、表裏の経文の行数の差は二一行である。元興寺極楽坊所蔵の柿経の資料には、二〇本一組の経木の基部をこよりで結わえ、扇のように広げると、表・裏と経文が連続するようになったものもみられる。今回出土した経木は、これと同型式のものと推定できる。

(2)は、第二卷譬喻品第三の二六三行目である。(1)と同じ品題であるが、こちらは片面にのみ書写を行なう。

(3)は、第四卷五百弟子受記品第八の六七行目である。片面に書写を行なう。

(4)は、第四卷法師品第一〇で、表が五七行目・裏が五八行目である。両面に書写を行なうが、(1)と異なり、表裏の経文は連続する。

これは、折り返しとなる順番の経簡と推定できる。

(5)は、第五卷安樂行品第一四の八八行目～一〇七行目で、連続する経文である。いずれも片面に書写を行なう。

(25)は、第六卷法師功德品第一九の一二六行目・一三七行目・一三八行目である。いずれも片面に書写を行なう。(25)の経文中の

「童」は「意」の誤字であろう。

(28)は、第七卷藥王菩薩本事品第二三の四二行目である。片面に書写を行なう。

(太田吉男・上村和直)